

山と机 - Y先生のこと

人文学部助教授 鄭 基成

Y先生は私が上智大学でドイツ語を勉強していたころからの恩師である。Y先生の人生をひと言で表現するとすれば、「山と机」である。山を愛し、本に親しまれた一生である。

豪放磊落な風貌の内側に草花を愛する繊細な心を宿し、言葉巧みな懸河の弁で私たちを魅了する先生の心の奥底には、都会の文明生活やこの世の名声に対する嫌悪とうらはらに、山の静寂への憧れが秘められていた。テレビは先生に言わせれば「電気紙芝居」であり、新聞は「書を読まぬ人間の暇つぶし」であり、勲章は「グリコのおまけ」ということになる。これみな「愚民愚衆沙汰」というわけである。人との交わりはできるだけ狭く深くありたい、付き合いを広げない代わりに大自然と豊かな対話ができるから、と先生はよく言われていた。山の静けさとはどんなものだろうか。静かな冬の林を往くとき、たった一枚の枯葉が落ちて小枝に触れるその音は驚くほど大きく響くんだよ、と先生は描写された。

戦後まもなく南アルプスの山塊のもつ幽邃とそこに包蔵される深い神秘性に強く心がとらえられた先生は、いまから三十年ほど前その麓に小さな山小屋を設けられた。それはY先生にとって、喧騒に満ちた「社会からの脱走」を果たし、山の豊かな自然と静けさの中にその一部となって生きるための大切な場所であった。ドイツ語で書かれた山岳文学の翻訳を数多く手がけられた先生は、かつて、若くして山に命を落とした天才登山家であり名文家であったヘルマン・プールのふるさと、ベルヒテスガーデン・アルプスに静かにたたずまい、「バイエルンの宝石」といわれたラムサウ村をたずね、周囲に展開する山々の景致に心奪われたという。Y先生の山小屋はヒュッテ・ラムサウと名づけられた。なぜか西に面した山小屋の庭先には、先生が「俺の山」と呼んでおられた甲斐駒ヶ岳をはるかに仰ぎ見る何万エーカーの借景につながる広闊な明るい緑の草原が野趣満々と広がっている。晩年は二千メートルの稜線が描き出す「神韻縹渺たる」眺めを目にしながら、

アルプスの山々へのファンタジー登山を心行くまで味わい、その広大な山裾に佇む《小さな家》の《狭楽しい》と表現された部屋でバイエルン風のコーナーベンチで親しい友人とともにビールと静談を楽しまれた。

Y先生は常々、書斎の机は立派なものをもてよ、と言われていた。先生にとって書斎の机の上の景色は、山の中の景色と同じように心に深い安らぎを与えてくれる場所であり、ご自分の机を仕事への情熱を捉えてこれを追及するための《砦》と呼ばれていた。電車の中で立ったまま物を読むなんて俺は軽蔑する。まるで故郷を離れてさまよう流浪の民に似て哀れだ、とは先生の口ぐせ。車中を第二の書斎にしている私にとっては耳の痛いお言葉。これまた「愚民愚衆沙汰」である。

2年まえ、これまで書いてこられた先生の珠玉のエッセーを一冊の本にまとめ、自費出版された。『緑の誘惑』と題され、手のひらにすっぽりと入ってしまうほど小さなこの本には著者名は印刷されていない。限定60部(最初はたったの6部)のうち頂いた44番目のご本には見開きに私ども夫婦への献辞が書かれているだけである。美しい麗書の文字の一つ一つが、ご自身による挿し絵とともに読むものを魅了してやまない。こんな一節がある。「机はその持ち主にとって、一つの王国のようなものである。そこにいる限り、誰もがその国の王様なのである。王様は、世界各地からこの国を訪れる旅人を迎えるだろう。旅人とは、貴重な知識の泉にもたとえられる書物である。」このY先生のことばは今となっては私たちにとっての貴重な遺言であり、座右の銘でもある。昨年、先生の大好きだった梅の花が散りしきるころ、静かに天に召された。

『緑の誘惑』は私にとって崑崙の玉にも比すべき大切な我が書斎の小さな宝物である。宝の扉を開くたび、Y先生は生きるためのことばを運んでくれる旅人としていまも訪ねてきて下さるような気がする。

(チョン・キソン)